

第一章 「三國演義」の發展のあと

「三國志」という名がしめすように、この小説は中國が三つの國に分れて争っていた時代(西曆二二—二六五年)のことを書いたものであるが、「三國志」とは實は正史の名であって、晉の陳壽(二三—二九七)の編集にかかり、小説とは別の書物である。小説のほうは、正史を誰にもわかる平易なことばに書きかえたという意味で「三國志平話」とか、「三國志通俗演義」などとよばれた。(江戸時代にできたわが國の譯本の表題も「通俗三國志」であって、ふつう三國志とよぶのは略名にすぎない。)小説の作られた確かな年代はわからない。のちにのべるように、そのもっとも重要な作者は羅貫中であるが、しかし物語はいっぺんに完成したものでなく、長い年月のあいだに成長したもので、したがって羅貫中の前後、幾百年にもわたる期間がその成立の歴史である。それは大體三段に分けることができる。

歴史事實から離れた三國の物語が発生したのは、おそらく大へん古いことであつたろうが、小説史の研究者によると、唐の時代(はつち)の末にちかい李商隱(八一三—八五八)の詩の中にはその痕跡がうかがわれ、またほぼ同じ時代の段成式が太和年間(はつち八三五年ごろ)の事として、その弟の誕生日の祝宴に演ぜられた藝能の一つに「市人の小説」なるものがある、三國時代の物語をしたとある記事が注意されている。宋になると蘇軾(一〇三六—一一〇一)が、町の子どもを集めて三國の物語をするものがあったことを記しているし、かれの死後まもないころの宋の都汴京(今の開封)の繁華を記録した書物によると、そのころようやく盛んになりつづつあった「說話」(すなわち講談)の中には「說三分」すなわちこの三國の物語を専門とする藝人があつたことが知られる。一一二六年に北方から侵入してきた金(女眞)の



李卓吾批評三國志 (天理圖書館藏)

軍隊のため開封が落ち、宋の都が江南の臨安(今の杭州)に移ったのちも、市民たちの娯楽としての講談はいよいよ榮えた。むろん三國の物語も、その藝人らによって絶えず語られていたと想像される。だが以上はすべて小説とし「三國志」としては今のところ前史であって、その物語の内容はほとんど不明である。われわれが今日手にすることのできる最古のテキストは元の時代のもので、「全相三國志平話」と題する至治年間(一三二一—一三二二)の刊本である。

全相というのは畫入りであることを意味するが、この本ははじめから終りまで毎ページすべて二段に分れ、上の段は畫、下の段は物語の體裁である。その文章は粗雑きわるもので、たんに俗語をまじえているためだけではなく、意味の通じがたいところも少なくない。人名・地名などにはあて字が多くて、講談師のあいだに口づたえに傳わった話を文字に書き取ったそのままかと想われる。魯迅のいうごとく、畫入りであるのは、やはり讀み物として編せられたにちがいないが、おそらく講談師のテキストをそのまま用いて、大して手を加えなかったのであろう。それがあまりにも粗雑すぎるので、ある學者は別にもっと完全な小説があったのではないかと疑うほどであるが、元の時代の戯曲(いわゆる雜劇)の中の三國の故事を仕組んだものと比較してみると、その内容はだむねこの「平話」に同じく、くに人名のあて字のごとき細部まで一致するもののあるのは偶然でなく、この「平話」以外に別種のテキストを想定するのは不可である⁽²⁾。

その一例だけをあげるならば、(朱凱の作といわれる)戯曲「黃鶴樓」の中で劉封のせりふに、「おれの三ばんめの叔父張飛はただ十八騎で、當陽の橋のほとりに立ち、そのよばわった一聲に、橋は三つにくずれ落ちて水はさかきにおどろいた曹操の軍勢は三十里あまりも退きおった」(第一場「頭折」とある⁽³⁾)。「平話」では張飛は二十騎をひきいて當陽の長坂の丘の高みに立ち、川のむこうに曹操の三十萬の大軍がおしよせてくるのを見ると、「われこそは

燕人張翼德なり、誰か敢てわれと死を決せん」とさげんだ聲雷の耳をつらぬくがごとく、橋も切れて落ち、曹操の軍勢は三十里あまり退いた(卷中「張飛拒水斷橋」というのに、ほぼ一致する。この話をつぎに述べる「三國志演義」に比べると、「演義」もまた「平話」と同じくこの一段に「張益德、水に據って橋を斷つ」「平話」の拒は據のあて字、益德は張飛のあざなであって、「平話」にこれを翼と書くが同音の字である、ただし翼は必ずしも「平話」だけの用字ではない)という題目をつけ、二十騎あまりを従えた張飛は、橋の上に立って大聲にさけぶ、これを聞いた曹操は、『張飛は百萬の軍の中につき入って大將の首をとること、ふくろの中の物をさぐり出すようだ』とかつて關羽がいったのを思い出し、丞相のしるしのきぬ傘などを取り隠させる。曹操の軍勢の動搖の色を見て取った張飛は、目を見ひらいて又もやさげび、その聲に、曹操のそばにいた夏侯霸が肝をつぶして、まさかさまに落馬した。それをきっかけに曹操は馬をかえしたから、大將たちも兵士も一せいに西へと逃げはじめる。張飛は長坂橋を切りおとして置いて、玄德の後を追う(卷九)というのである。「斷橋」の題目は同じであっても、張飛の大聲に橋がくずれおちたという(平話)のと、敵を一たん追いかえたあとで、その追撃を少しでもおくらせるために橋を切りおとしたという(演義)のは、大きなちがひがある。前者が張飛の武勇をあまりにも誇張しすぎているのに對し、後者とても、曹操軍の退却はちょっと有りえないような話ではあるが、よほど合理化されている。が、それほど不合理ではあっても元の時代の人々はそれで満足していたらしい。

ともかく唐代(すなわち九世紀)以來、講談として發達をつづけてきた三國の物語が、元の「三國志平話」に至って、一おうまとまった形になったのである。そして元の戯曲は、ほとんど、この平話をよりどころとして構成された。以上が物語の成長の第一段である。

「平話」が、いかに幼稚な、お伽話に近いものであったかは、上にあげた張飛の長坂橋における武勇傳の一例だけ

でも想像されるかとおもうが、巻頭第一の書き出しは、それにわをかけた荒唐無稽の夢物語である。それは後漢の光武帝のときの書生司馬仲相というものが三月三日の清明節の日に、とくに開放された宮中の御庭の中で酔っぱらった夢に陰司に入り、地獄の閻王の代理をつとめて、韓信・彭越・英布らの訴をきく。かれらの立てた軍功によって漢の高祖は天下を手に入れたにかかわらず、いよいよ帝位にのぼると、事にかこつけ三人を除こうとはかり、三人とも罪なくして非業の死をとげたのであったから、死後も無實をうったえていたのであった。仲相は原告被告をよび出し、言い分をきいた上で天公に奏上した結果、つぎのように處分される。すなわち韓信は曹操に、彭越は劉玄徳、英布は孫權に生れかわって漢の天下を分けどしし、高祖は獻帝となり、高祖にすすめて韓信らの命を害させた呂后は帝の伏皇后に生れかわり、また韓信の謀臣であった蒯徹は諸葛孔明となって玄徳を助ける。さらに仲相自身はこの長いあいだの懸案であった疑獄を解決した功によって、未來は司馬仲達と生れかわり晉をたてて三分の天下を一統する運命を與えられるというのである。この話は宋代の作とせられている「新編五代史平話」の冒頭にものせられていて(わたくしはこの本も實はおそらく元代の作であろうとおもう)、さらに簡單であり、曹・劉・孫の三人の前世をだれに當てるかは、「三國志平話」とは、いささか相違の點もあるが、大體のすじは同様である。この生れかわって、あだをうつ物語の中に佛教の因果應報および輪廻の觀念がふくまれていることは、いうまでもないが、「三國志平話」においては單に物語の發達としての役をつとめるにすぎないこの話は、民衆の好みにあつたものとみえて、明末(一六二一年ごろ刊行)の短篇集「古今小説」には、さらに擴大されて獨立した一篇の小説として收められている。また平話の終りには玄徳の子劉禪が降つて蜀の國が亡びたとき、漢(蜀は漢の後繼者をもつて任じていた)の外孫劉淵だけがのがれて北に走り、のち兵をおこして晉をほろぼし、漢のためにかたきをうつことが書きそえられてあつて、この物語はかたきうちに始まって、かたきうちに終ることになる。劉淵は匈奴の一部族の酋長であつて、漢とは直接の血すじ

のつながりはないが、かれが漢と同じ劉氏を稱したことによって、漢とのつづきがらを強調するのは史實から離れている。鄭振鐸氏のいうごとく、「平話」はまったく「民間の粗製品」であつた。

物語が發展した第二の段階は、さきに引いた「三國演義」である。くわしくは「三國志通俗演義」といい、十四卷に分つ。作者は羅貫中。貫中はあざなで名は本といい、明の賈仲明の「錄鬼簿續編」によると、かれの本籍太原であり(今の山西省の太原)、「湖海散人」と號し、至正甲辰(一三六四)に賈仲明と再會したが、そのうち六十年餘、消息なく、どこで死んだかわからないとあるから、元が甲辰から四年後一三六八年に滅亡し、明となったのちなお數年あるいはそれ以上生存していたらうと考えられる。羅貫中の傳記については、これ以外のことはわからぬ。賈仲明の右にあげた本は戲曲作家の人名録であつて、羅氏にも雜劇三種の作があつたことが知られ、今日でも一種だけは傳わっている。羅氏の作と稱する小説は他にも幾つかある。有名な「水滸傳」も少くともその完成者は羅氏であるらしいし、「平妖傳」二十回は、のちに増補されたが原本は、やはり羅氏の作という。また、「隋唐兩朝志傳」や「殘唐五代史演義」も、かれの名を題しているが、はたしてそうであるかどうかは不明である。

「演義」の刊本で今日知られている最古のは弘治甲寅(一四九四)の序文があるため弘治本とよばれているが(影印本あり)、實は嘉靖元年(一五二二)の刊本だという。そのテキストが羅貫中の原作のそのままであるかどうかについても、疑問がある。しかし現在のところ、もっとも原作に近いことはたしかである。この書は「晉の平陽侯陳壽史傳、後學羅本貫中編次す」と題して、後學という書きぶりにも歴史家へのあこがれが大いに見られ、市井の講談師風情とはちがうことを示そうとの心もちが存する。巻首には「三國志宗僚」と題する(この小説に出てくる人名の表がのせられていることにも、作者の正史についての知識がうかがわれる。かれが「三國志」そのほか(たとえば「資治通鑑」などの)の歴史をそうとうよくよんでいたことはたしかである。正史にしるされている事實を重んじようとする

態度は小説の中にもいたるところに見られる(附考二参照)。

その結果、「平話」の發端をなす司馬仲相の轉生談や、卷末の劉淵への言及もすべてけずられ、ぜんたいにわたって史實に反する記述は少なくなった。分量からいっても、「演義」は「平話」の十倍以上に達するから、これは改訂というより創作といってさしかえないものである。もちろん現代人から見れば非現實的なところが少なくないが、民初という今から五百年以前の人の手に成ったという條件を考えると、よほど合理化されている。さきに引いた例においても、張飛の一聲で橋がくずれおちるといような「平話」の不合理な點が改められたが、それはこのみではない。いわゆる弘治本の演義が出版されたのち、これを翻刻した版本は幾種類も出、やがて書店によっていろいろ手を加えられた。さし畫の附加ばかりでなく、卷數も二十四卷が十二卷となり、二十卷となったが、その節のわけ方はなお弘治本のそれをおそっていた。すなわち弘治本では二十四卷の各の卷を十節ずつに分けたから、合計二百四十節となる。その後の版本で卷數のちがいはあっても總計二百四十節となる點は同じであった。この二節をあわせて一回とし、全部を百二十回とした(卷に分けない)のは、今日知られているところでは李卓吾批評と題する本に始まるので、たぶん萬曆年間(十七世紀のはじめ)であろう。李卓吾すなわち李贄は明中葉の異色ある思想家であるが、かれ自ら手を下して三國演義の批評を書いたかどうかは疑問がある。清朝になって、最も流行したのは毛宗崗(あざなは序始)が批評を加えた本である。この本が出てのち、それ以前の他の本はすっかり壓倒されて影を消してしまった。そして又、この本(以下毛本とよぶ)以後、これに改訂を加えた人もないので、けっきょく毛本は物語としての三國志の發展の最後の形となるわけである。以上が第三段である。

以上わたくしは三國志物語の發展のあとをたどりつつ、この物語が、いかに長い年月のあいだに成長して來たかのあらましをのべた。多くのテクストの微細な異同を比較し、その變遷の様相を正確にあとづけることは、わたくしに

は今その便宜がないから、他日を期することとし、以下には、この小説の成長してきた方向、それがはたしてどんな意味をもつかについて、いささか臆説をしるしたい。

まず第一には、すでに少しくふれた「平話」から「演義」への發展にともなう、いちじるしい合理化の方向である。實は合理化と同時に、つよくはたらいっているのは勸善懲惡の倫理觀念である。一たい小説においてこのことが強調されるのは明になってからであろう。元以前の小説のテクストは殘存するものも少いが、かかる觀念の支配はきわだっていない。むしろ、さきの「平話」のごとく因果應報という形式がとられ、それは佛教の思想にもとづくものであるから、その輪廻談が取り去られたことは、佛教思想からの離脱という意義をもつと、わたくしは考える。がんらい、「平話」は別のことばでいえば「話本」であって、その意味は講談のテクストであるが、宋時代の講談すなわち「說話」は純粹に市民たちの娛樂であつたものの、そのみなもとにさかのばれば、「說話」は直接に唐時代の「變文」の系統をひく。「變文」とは佛教の宣傳文學であつた。「說話」のなかに、とくに形式において、いちじるしい「變文」の痕跡が見られることを、わたくしは他のところでのべた。それが僧侶の手をはなれて市民のあいだで行われるうちに、しだいに佛教的なものは薄らいでいったが、元の時代になつてもなお去りやらぬなごりが、輪廻談のような形でまつわりついていたのである。つまり元から明へのうつり行きによって、小説は佛教から決定的に離れた。だが、それと同時に附け加わつた新たな色彩は儒教の思想である。勸善懲惡ということばは、がんらい春秋左氏傳の杜預の序に見えるのであつて、「演義」の序文における「勸懲警懼」ということばも明らかに儒教のものであり、その具體的な内容は忠義である。すなわち忠義をすすめて、不忠をこらすことが、この小説の眼目となる。もちろん、「平話」にもすでに結局は漢室を篡奪する逆臣である曹操へのつよい反感と、反對に漢室の後繼者となる劉玄德への同情とが、あらわに示されている。それが古く宋時代からの民衆の感情であつたことは、この文のはじめに引いた蘇軾のことばの中に、

つづけて「町の子どもらは」三國の事をかたるものが、劉玄德が敗れるときけば涙を流し、曹操が敗れるのを聞くと、よろこんで快をとる」とあるのは、それを證する。しかしながら「平話」では、その逆臣曹操が天下の大半を支配するようになったのも、もとはといえば高祖が韓信を無實の罪で切らせたむくいであつたと説く以上、なおその行為が前世の因果によって是認されるような感じをも與える。「演義」は因果話を除いたことによって、曹操の悪を明白な、あらがい難い罪として示したことになる。

さらに又、さきの「平話」の刊本は全ページ畫入りであつたが、弘治本の「演義」には、さし畫はない(ただしその後の翻刻本には大むねさし畫が加えられてある)。これも偶然ではなく、婦女童幼の讀み物以上の地位を要求するという意味をもつのではないかとおもう。弘治本の序文に『前代の人は野史によって評話(評と平とは同音で、おそろく「平話」をさす)をつくり、瞽者(めくら)をして演説せしめた。その間の言辭は鄙諺であつて、野卑に失したので、士君子はこれをいとうた』とある。平話のごとく野卑でないことによって、士君子の讀み物としてもはずかしくないものである。そもそも「演義」という題を小説にあたえるのは羅貫中にはじまるのではないかとおもわれるが、この二字は晉の潘岳の「西征賦」に見える。

靈壑川以止關、晉演義以獻説

『周の靈(王)は川をふさぎて關(たにかい)をとどめ、(おなじく周の太子)晉は義をのべて説を獻ぜり。』(文選、卷二十)文字のつかい方はやや異なるが、古典に由來をもつ熟字であることは、「平話」とはちがう。このような文字をつかうところにも、羅氏がじぶんの著作に對し、さうとう氣おつた身がまが感ぜられる。⁽¹⁰⁾

以上は、どちらかといえば「演義」の外部的特色についてのべたが、つぎにその内容、とくにそれを構成する人物の性格について論じよう。「三國演義」の構成は大たい前後二部に分れる。前半(約十六卷、毛本でおよそ八十回)は

劉備・關羽・張飛の三人が桃園において義兄弟のちぎりをむすぶことに始まり、黃巾の賊の反亂のため漢室は衰え、諸方に割據する豪傑らの競争をうつし、そのあいだに劉備が幾多の危難にあいながら、二人の弟の助けと、最後にあらわれた諸葛孔明の力により、難をまぬかれ、ついに荊州(いまの湖北・湖南地方)を根據とし、さらに西へすすんで蜀(いまの四川地方)を攻めとって、魏・蜀・吳の三國鼎立の形勢まったく成り、劉備は蜀の皇帝の位につくところまで一段落となる。後半(約八卷、毛本ではほぼ四十回)に入ると、劉備は弟の關羽をうたれた恨をはらそうとして東のかた吳を征伐に出るが、戦い利あらず、これよりさきに死んだ張飛のあとを追って劉備は病死する。そのあとは暗愚の後主劉禪を助けて活躍する諸葛孔明の一人舞臺である。孔明は一たび不和になった吳とは講和して、西南方の蕃族を討伐してこれを降伏せしめ、かくて後方の憂を絶つた上で、中原回復の宿望をはたそうと、たびたび北征して魏の軍と戦いをまじえるが、いつも成功せず、とうとう第六回めの北征(卷二十一、諸葛亮六たび祁山に出づ、以下)(毛本第二百二回)の陣中で病死する。かれの死によって蜀の國は大黒柱を失ったわけで、魏に代つて中原の主となつた晉の軍隊の進撃を防ぎきれず、後主は降伏して蜀は亡び、やがてまた吳の國も亡んで、天下は晉によって統一される。前半の最高潮が孫權と劉備との連合軍が曹操の大軍をうちやぶる赤壁の一戦であるとする、後半では、孔明の死——「秋風五丈原」(毛本第二百三回)の一節にいたって頂點に達する。それには英雄の死にふさわしい悲壯の氣がみなぎっていて、作者羅貫中の筆力の非凡さを感じしめる。

前半における主要な人物は劉・關・張の三人である。孔明はもちろん前半でも重要な位置をしめ、智謀において曹操とならんで全篇中の第一人者である。しかし魯迅の評したごとく孔明は「智多けれども妖に近し」であつて、その智慧が人間以上のものであることは、讀者にかえつて物たりぬ感をあたえるであらう。魯迅はまた劉備を「長厚けれども偽に似たり」と評した。たしかに劉玄德は人のよき、慈愛ぶかさが、かえつて偽善的にうけ取られるであらう。⁽¹¹⁾

この二人のえがき方は、かくて必ずしも作者の意圖にそわないものとなった。魯迅はただ一人關羽だけを成功だとして、「義勇の概、時々如見」といった。まことに關羽の義勇は、讀者の目の前にさながらに現れてくるようである。

魯迅が例に引いた「華容の道」の一段は、赤壁の戦にやぶれた曹操の退路を、孔明が華容縣への道において斷ちきり、これを攻撃せんとする、しかも孔明は自身、曹操の命数がまだ盡きはててはいないことを知り、又この役目を關羽に命ずることは、曹操を落ちのびさせるのと同じだとも知っていながら、わざと軍法を守るべきことを強調し、關羽に「軍令狀」——誓約の文書——を書かせてから出發させる。關羽はかつて曹操の恩をうけたことがあるから、いよいよ出あってみると、涙をながして頼むことばを、むげにしりぞけかね、歎息とともに全軍をゆるし、曹操は命をたすかるのである(弘治本第十卷、毛本第五十回「關雲長、義によって曹操を釋す」)。魯迅はこの一段を引用して、「ここに敍せられた孔明はただ狡猾を見るだけであるが、關羽の氣概は凜然とちかづきたい」といって、元刊本平話のこの條とを比較して、「演義」のすぐれた筆致をたたえている。わたくしも魯迅の考えにまったく同感である。

關羽の忠勇がほめたたえられたのは、「平話」でもそうであったが、「千里獨行」や「單刀會」その他、かれを主人公とした戯曲も多く作られ、忠義一途にこりかたまつたかれの誠實さが讀者と看客ともに感銘をあたえて來た。かれには狡猾・怯懦の色はいささかもない。かれを宋代以來、神として崇拜することが各地におこつた。⁽¹³⁾ 元の戯曲においてかれを關大王と稱するのは、宋代にかれの廟におくられた神號にもとづくのであり、元刊本の平話でも關羽の名をそのままに稱することはきわめて少く、大てい關公とよんでいるのは(張飛にはこのことがない)、その名をよびつけにすることをはばかつたのである。このことは「演義」においては、さらにいちじるしく、卷頭の人名表の中でも「關某」と書いてある。これは清朝に孔子の名をそのままに書かず邱の字を用い、音讀するときには孔丘といわず孔某とよむ習慣であつたのと同じで、神としての尊敬を示すのである。元の戯曲の中には、じっさい神としてのかれについ

てのべている處もある。⁽¹⁴⁾

しかし關羽が民衆の尊敬をかちえたゆえんは、神としてのおそれよりも、かれの忠勇誠實の純一な精神であつた。かれは「三國演義」中の英雄の隨一である。かれの死もまた孔明と同じく、英雄の死としての悲壯な美しさをたたえている。

わたくしは關羽について少し多く語りすぎたように思う。というのは、わたくしがもっと力をこめてのべたかったのは張飛のことなのであるから。わたくしは讀者諸君にもっと張飛に對して注意をはらっていただきたいのである。そして魯迅がかれについて、何もいっていないのを、いささか不満なのである。さて關羽の神勇は人々の讚歎の的であるけれども、かれは經書の一、「春秋」の愛讀者であつて、讀書人というほどでもないが、中國人のいわゆる儒將とよばれていくらかの教養をそなえている。その點で、庶民らにとっては、むしろ近づき難い感じがないとはいえないであらう。これに比べれば張飛は、完全に無智・無教養の野人としてえがかれてゐる。さきにあげた「千里獨行」の一段における關羽は、生れたのが同じ日でないのはぜひもないとして、せめて同じ日に死のうと誓つた二人の兄弟、劉玄德と張飛とから、ある戦のち、分れ分れになり、思いもよらぬ曹操の保護をうける身となつた。曹操はかれにとっては敵であつたが、兄弟の消息が知れぬため、しばらく身を屈した。しかしそれには三の條件があつた。第一には兄よめ(玄徳の二人の妻、甘夫人と糜夫人)らと住居を一つにせず、かならず二つに分けたやしきに住むこと(一宅分兩院)、かくて兄よめの節操をきずつけまいとすること。第二、劉玄德の消息がわかつたら、ただちにそのもとにおもむくこと。第三、漢の丞相としての曹操に、すなわち漢に降つたのであつて曹操その人に降つたのではないこと(降漢不降曹)を明らかにしておくこと。かれ自身、この約束をかたく守り、曹操が何とかしてじぶんの部下につけたいと、さまざまな誘惑を試みるのをしりぞけて、玄徳への忠節を全うし、しかし曹操のために顔良・文醜二人の敵の

強將を切りすてて功を立て、この功をもって恩に報いたとし、玄德が荊州の劉表のもとに身をよせていると聞くや、その日のうちに、曹操からのおくり物はすべて返して出立し、無事に兄よめたちを玄德のところへ送りどけるのである。以上が「千里獨行」のあらすじであるが、關羽の何ものにも屈しない意志の強さと同時に、かれがその忠節をつらぬくためにはらう行きとどいた注意の細心さがえがかれていたことが、讀者を感歎させる。

ところが張飛はそうではない。教養なく粗野でらんぼうな無法者である。元の末から明のはじめへかけての「雜劇」の中に、かれをとくに主人公とするものが四種ある⁽¹⁵⁾。その中で、かれについては、いつも「莽撞」——むこうみず——という形容詞が用いられている。「莽張飛大鬧石榴園」(孤本元明雜劇第七十)のごとく「莽張飛」が戯曲の題名をなしているものさえある。この無てっぽう、短氣、むこうみずが、かれの特色なのである。だから正史の「三國志」では玄德の行爲としてしるされている督郵をむちうつ事件——玄德は黃巾の賊を討伐した功によって安喜縣の尉(刑獄をつかさどる知事の輔佐官)に任ぜられたが、ここへ巡察にきた督郵(州の長官に屬する監督官)がごうまんで、玄德が面會をもとめてもおおうともしない、はらを立てた玄德は、おし入って督郵をしばらくあげ、むちうつこと二百回、じぶんの縣尉の印綬(官印はその職の責任者であることの證である)を解いて督郵の首すじにひっかけ、馬をつなぐ、いにしぱりつけたまま、官をすてて亡命する話(「三國志」蜀志卷之二)——は、「平話」でも「演義」でも張飛のやったこととして語られ、玄德はそれを制止しようとするが、だめであった(毛本第二回)。

そのほか、關羽が兄よめたちを守って苦心のすえ、ようやく玄德のもとにたどりついた時にも、張飛はかれがひと曹操の部下としてはたらいしたこと疑をもち、追手として攻めよせてくる蔡陽を、三ど太鼓をならすうちに打ちとれといひ、關羽がこれに應じて太鼓の第一聲の終らぬうち、早くも蔡陽を切りおとすと、はじめて釋然とするのも(毛本第二十八回)、いかにも張飛らしく短氣であるが率直である。(正史では蔡陽を斬るのは玄德となっているが、歴史の

敘述の習慣で戰鬪の勝利者としてはその軍の主將の名だけをあげるのが通例であるから、じっさい切ったのが誰であったかはわからない。しかし正史における實在の玄德は、小説にえがかれた玄德よりはもっと勇猛で、智謀にも長じていたらしい。)玄德が孔明をまねこうと三顧の禮を厚うするときにも、孔明はなかなかえんじないのを、無禮だと怒り、その草堂に火をつけて追いつぞとわめくのも張飛である(毛本第三十八回)。以上二條のうち、蔡陽については、「平話」にも、とくに「十鼓にして蔡陽を斬る」と名づける一段があり、三顧のエピソードには「演義」と全く同じことばはないが、張飛の態度に異なりはない(卷中)。張飛は關羽の死んだのち、いきどおりにたえず、酒をのんで酔っぱらい、部下をむやみにぶんなぐったりするので、憤慨したある將校がかれの寢首をかりて敵に降参するのが、かれの最後であるが、これもやはり無法ものの張飛にふさわしい死に方であった(毛本第八十一回)。

張飛と關羽とは同じく勇將であり、忠義の誠心にかわりはないが、教養と無教養、細心と無てっぽう、節度と粗野のごとく全くあべこべの對照をなす性格としてえがかれているのは興味がある。後者のような性格に文學の主人公としての位置をあたえることは、おそらく元⁽¹⁶⁾にはじまるのであって、雜劇における張飛のことはすでに上に述べたが、それと時代を同じうする「平話」においても、性格に變化はない。ただ「平話」の文章はあまりにつたなく幼稚で、雜劇の力づよい描寫には、とうてい及ばない。(その點からも雜劇が平話を種として構成されたこと、すなわち、小説と戯曲という順序は一おう肯定されるであろう。)演義においては、平話の中あまりに荒唐無稽な場面をけずり去った結果、張飛の活躍する機會は減少した。たとえば「杏林莊」(卷上)や「古城」(卷中)などである。後者はやはり關羽の「千里獨行」に關係した挿話で、玄德や關羽とわかれた張飛が、ある「古城」の中で山賊をあつめ、みづから「無姓大王」と名のっている、そこへ趙雲をしたがえた玄德がとおりがかり、趙雲と張飛とのほげしい切り合いははじまるのである。演義においても「古城」の一段はのこっているが、張飛がここで大王と稱したとか、「快

活」という年號をつくったとかには、一言も及んでいない(毛本第二十八回)。前者は發端にちかい黃巾の賊の討伐における一つのエピソードで、張飛がただ一騎で多數の賊の陣營へのりこむというのであるが、演義にはこの話の影さえない。

このように演義では無法ものの張飛の活動がいささか封ぜられ氣味となり、どちらかといえば關羽の方がますます大きく力づくあらわれていて、張飛はそれより一段下のものとしてあつかわれる傾向がある。二人の相反する性格が、ほぼ同様な地位におかれてはじめて對照の妙をしめすはずのが、一方をやや重くしすぎたために、つりあいとれなくなった感なしとしない。またこの物語の後半の面白さが前半にくらべて劣るのは、孔明という智謀の士だけにすべての筆墨が集中されていて、張飛のごとき痛快な人物がもはや登場しないことが大きな原因をなすであろう。

だが、ひるがえって考えてみると、中國の文化の基調をなすものは古來、中庸と節度とであった。このような文化の性質は、大たい宋代において、ほとんど到達すべきところまで行きついていたようにおもわれる。かくして長い年月をへて定着に近づいていた文化の様式をになうものは教養ある知識人である。中國の支配階級たる士大夫なるものは、いわゆる「讀書人」であって、讀書によってこの文化に參與することに大きな誇りを感じていた。これに對して、そのような文化とは何か異質の精神をいだいていたのは、宋代からしだいに擡頭しはじめていた庶民である。そして異民族たる蒙古人が中國的世界の支配者となったとき、從來の文化の權威は根本からゆらぎ、まったく新しい精神があらわれてきた。

わたくしは張飛のような庶民的英雄が文學において出現するのも、やはり中國の文化の歴史における重大な變化がもたらしたものであったと考える。それは一言でいえば、擡頭しつつある庶民のなかから生れたのである。この小説に包まれている庶民の精神についての今一つの例證をつけ加えるならば、この物語が、玄德・關羽・張飛の三人が、

ただの君臣ではなくて義兄弟のちぎりをむすぶことから始まることである。この三人がとくべつに親密な關係にあったことは事實ではあるが、しかし義兄弟になったことは正史に見えぬところで、後世に發生した傳説にちがいない。やはり元の時代の作でないかと考えられる「五代史平話」の中に出てくる、五代の各王朝の君主が義兄弟をもつ話の多いのから見ても、このころには誰も怪しまなくなっていたであろう。實さい五代の君主が義子をもったりすることは、それまでにない新しい社會的事實であった。それは家がらを重んじ、同姓女子を妻とせぬ反面に異姓の男子を養わぬことが道德的規範として堅く守られていた貴族制度の時代には、おもいもよらぬことであつたろう。それはいかにも庶民らしい習慣である。そして君臣の節義を血をすすりあつた義兄弟の義理でおきかえた「三國志」の物語は、たしかに庶民のために書かれたといつても誤りではあるまい。

しかもその庶民の精神をもっともよく代表するかに見える張飛の性格が、平話あるいは雜劇から演義への發展において、かえって弱められ、やや卑小化するのは何ゆえであるか。元から明への移行は、文學の世界では、とくに白話小説というジャンルが、すぐれた作品の形で結晶した時にあたる。このときに白話小説は、ひじょうな飛躍を見た。しかし、それと同時に作品の形成に、ほとんど無意識ともいえるが、新たに加わったある壓力があることも見のがしてはならない。わたくしは、さきにこの小説の儒教化ということばを用いて、その壓力の加わり方を名づけた。それは一面からいえば合理化であり、たしかにそれだけ大きな成長ではあつたのであるが、宋元以來の庶民の精神の方向とは必ずしも全く一致するものではなかつた。わたくしは、それはむしろ文化全體における、舊い様式へもどろうとする動きの一つのあらわれではなからうかと考えている。

(1) 以下「三國志平話」の成立までは、大むね魯迅の「中國小説史略」(一九三〇年改訂本)第十二篇および第十四篇による。南宋の時代にこの物語が流行していた旁證として、人のよく知るものには洪邁(西曆一二三—一二〇二)の容齋續筆(卷十

(一)に關羽が顔良・文醜の二將をうちとったことを論じた條がある。正史によると關羽が殺したのは顔良だけで、文醜をうち取る話は小説にしか見えないから、洪邁がそれを論じたのは、おそらく當時の講談師の物語が意識の背後にあったと想像される。なお朱熹(一一三〇—一一九五)の語録「語類卷三十二」の中にも關羽の勇猛さに言及したくだりが、やはり講談師の語り方をおもわせるものであることは吉川教授の述べられたとおりである。吉川幸次郎氏「近世支那の倫理思想」二一ページ(岩波講座「倫理學」)。文天祥が(一二七九年)南宋亡びたのち、とらえられて隆興(今の南昌)に至ったとき北人(蒙古人およびその部下の漢人たちが)、かれの毅然として屈しない態度をたたえて「諸葛軍師なり」といったと、文山紀年録(文山全集卷一七)に見える。諸葛孔明を軍師と稱するもの「平話」または戯曲のよび方がひろまったものではなからうか。

(2) 趙景深氏の「中國文學史新編」(一九三六年刊)に平話と演義の用字例をあげてある。地名五例、人名九例のうち、元刊本雜劇と一致するのは、糜竺(演義、これが正字)を梅竹に、文醜を文丑に、夏侯惇を夏侯敦に作る三例が見出される。

(3) 「孤本元明雜劇」第二十二(第七冊)「劉玄德醉走黃鶴樓」。作者朱凱は元曲の作家を三期に分てばその第三期にぞくし、吉川博士の考證によれば十三世紀後半から十四世紀の前半へかけての時代の人である(青木正兒氏「元人雜劇序説」、および吉川幸次郎氏「元雜劇研究」)。

なお元曲の白の部分は明人の補ったもの或いは改めたものと見る説もあるが、少くともこの一條に關するかぎりはその恐れはない。というのは同じ意味の文句は關漢卿の作「單刀會」の第二折「滾綉毬」曲にも見出され、明抄本(孤本元明雜劇第一冊)と元刊本とは、ほとんど一致するからである。「有一箇莽張飛(元刊本は那殺漢に作る、以下こまかい異同はあげない)虎牢關力戰了十八路諸侯、……他在那當陽坂有如雷吼。喝退了曹丞相一百萬鐵甲貔貅。他睽一睽漫天塵土橋先斷、喝一聲拍岸驚濤水逆流。……」(孤本元明雜劇による)。作者關漢卿は元曲第一期の作家で、金の末から(一二三四以前)元が南北統一した(一二七九)のちまで生存していたとされる。平話の現在ある刊本は一二二一年ごろのものであるが、その内容は、それより數十年前すでに流布していたと考えても不當でないであろう。なお平話と雜劇との關係については注6の孫楷第氏論文参照。

(4) 鹽谷溫博士「全相平話三國志に就て」狩野教授還曆記念支那學論叢、昭和三年。倉石武四郎博士「小説家の正統論」同上。

(5) 鄭振鐸「三國志演義的演化」小説月報二十卷十號(中國文學論集)に收む、民國二十三年刊。劉淵が晉をほろぼす物語は明代に「續三國志」という名で別に行われた。くわしくは「續編三國志後傳」十卷(百回)で、萬曆十四年(一五八六)刊行。

清朝にも「後三國石珠演義」(三十回)(一名「三國後傳」と題する本があつて、前者とまったく同じではないが、物語の主要な點は共通であるらしい(孫楷第、中國通俗小說書目、一九三二年、および日本東京所見中國小說提要、一九三一年)。わが國では馬場信意の通俗續三國志三七卷がある(通俗二十一史に收む)。たぶん明本の譯であろう。

(6) 錄鬼簿續編は北平圖書館館刊十卷四號の馬廉氏校注本による。演義の嘉靖本については孫楷第氏「三國志平話與三國志通俗演義」(文史一卷二號)に考證がある。

(7) 演義の版本各種については、鄭振鐸、孫楷第兩氏の研究(注5)参照。馬廉氏にも「舊本三國演義板本的調査」(廣州、中山大學圖書館の館報、第七卷第五期、民國十八年)がある。

(8) 「變文と講史」(本篇第四章参照)。

(9) 弘治本の序文。これは作者羅貫中のかいた序ではなく、蔣大器(傳記未詳)が弘治七年(一四九四)につけたものではあるが、明代の人の演義または小説の役割についての考え方はうかがわれる。この考え方はずっとのちまでうけつがれた。清朝の咸豐三年(一八五三)の刊本の序文(句吳の清溪居士と署名してある、何人かわからないが癸丑すなわちこの年に常熟の顧氏小石山房の刊行した本にのせてある。わたくしは東北大學に藏せられる田岡嶺雲氏遺書の中にあるのを見た。上海の亞東圖書館の標點本はこれを底本としている)にも「意は忠義を主として旨は勸懲に歸す」とある。(二三ページ補注参照)。

(10) 演義の文字を書名につかしたものとして知られているものには唐の蘇鶚の演義十卷(今本二卷)があるが、これは漢籍の分類では雜家類の雜考のたぐいに入る(四庫全書總目提要卷一一八)のものであり、宋代には寇宗奭の本草衍義二十卷があった。その序文に「未だその理を盡さざるものあれば、これを衍して以てその理にいたらしむ」とあつて、衍は敷衍の意味であるが、古より衍と演とは同義であつたし、今日でも同音字である。佛書のなかにも大方廣佛華嚴經疏演義鈔九十卷のごとく經典の義疏のうちに演義を名とするものがあつた(唐の澄觀の著、大正一切經第三十六卷)。この二書はともにそれ以前の書物の言及しない點を補足し、またはとくに澄觀の著のごとく經典のかくれた奥義を明らかにのべたものであつたから、「三國演義」の目的が、もし歴史の通俗化にあつたとすると、よほど似かよつた用法である。

(11) 君主あるいは首領として尊敬される人物をこのようにえがくことは、「三國演義」のみでなく、「水滸傳」にもある。別にのべるごとく(第二章「水滸傳」の作者について)、「水滸傳」の宋江はどことなく偽善的に感ぜられ、金聖嘆のごときは、宋江を陰險だとして口をきわめてののしるほどである。また「西遊記」における三藏法師がやはり慈愛ぶかく、しかも無能力

者としてえがかれているのは、玄德の性格に似かよっている(第三章「西遊記」について)。わたくしは、小説における、このような君主または首領の性格には、近世中國の民衆の君主または支配者にたいする希望、すなわち、それが暴君でないことを切望する感情がこめられているように感ずる。歴史にあらわれた玄德はけっして慈愛ぶかいだけではなかった。「三國志」の陳壽の評では、玄德(蜀の先主)は「機權幹略は、魏武(曹操をさす)に及ばず、こを以て基字(領土)もまた狭し」とある。かれは權謀術數において曹操におよばなかっただけで、策略を用いなかったなどは歴史家はいつていないのである。

(12) 「關大王獨赴單刀會」は元の關漢卿の作、「關雲長千里獨行」は同じく元人の無名氏の作とせられ、このほか明初の作であろうが「關雲長單刀劈四寇」というのもある。みな孤本元明雜劇に收められて傳わっている。

(13) 關羽が神としてまつられた由來については、井上以智爲氏、關羽祠廟の由來並に變遷(史林第二十六卷)參照。同氏の引用されなかった零細な一二の資料をつけくわえるならば、唐の郎士元の「關羽祠、高員外の荊州に遷るを送る」と題する詩が全唐詩(原刻本)第四函七冊に見える。郎士元は盛唐の末から中唐にかけての詩人であって、中山の人、天寶十五載(七五六年)の進士であるから、この詩はあるいは井上氏が關羽廟の最古の文獻とせられた董挺の「重修玉泉寺關廟記」(貞元十八年、八二〇)よりもやや古いかも知れない。詩の中には關羽を詠じた字句がないから全文はここに掲げないことにするが、この詩の題の意味はやや難解である。しかしおそらく關羽の祠とは荊州玉泉山にあるそれを指すのであろう。また五代の蜀王は畫師趙忠義をして「關將軍 玉泉寺を起すの圖」をえがかしめた記事が、宋の黃休復の「益州名畫錄」卷中(函海本)に見える。關羽の靈が鬼神を役^{つか}てて寺を建築させるありさまを圖したものであったという。やはり玉泉山の開基にまつわる傳説である。

(14) たとえば「單刀會」の第一折「金盞兒」に「他上陣處赤力力三綰美髯飄、雄赳赳一丈虎軀搖、恰便似六丁神簇捧定一箇活神道」とある。第三句「あたかも六丁の神々のむらがりかこめる一人の活ける神のごとし」とは、關羽の容貌すがたが神に似ているというだけではなく、そのまま一個のいける神だというので、それは關羽が神であるとの意識を背後にもつことを前提としていると解してよいであらう。

(15) 「張翼德大破杏林莊」「張翼德單戰呂布」「張翼德三出小沛」(孤本元明雜劇、第十六冊、六七、六八、六九)および本文に引いた「石榴園」とが、張飛を中心としている。しかし莽撞という形容詞は、必ずしもかれを主人公とする戯曲でなくとも、かれが登場するときに習見する。

(16) 吉川氏「元雜劇研究」二八七ページ以下。田中謙二氏「元雜劇の題材」(東方學報、京都、第十三冊第四分)。なお「平話」

の文章が、雜劇におよばないといったのは、文字に書きあらわされたかぎりにおいてである。「說話」そのものは「平話」のテキストに傳わっているところに比し、もっとあざやかな表現をしていたかも知れない。たとえば、時代ははるかにくだるが、明のすえの講釋師として有名な柳敬亭が、水滸傳の武松が虎をうちころす一段を語るときには、「水滸傳」の本文からはなれて自由に物語ったらしい。ざんねんなことに柳敬亭の物語りぶりをたたえた文章(吳偉業の「柳敬亭傳」梅村家藏稿卷五二や、張岱の陶庵夢憶卷五の「柳敬亭說書」の條)は傳わっている、かんじんの物語りの筆記は存しないから、われわれはいたずらに想像をはせるのみである。「平話」のごときも、おそらく講釋師の心おぼえの程度にすぎないものではあったろうが、文字にかかれたかぎりでは、雜劇より見おとりがするのは、いかんともすることはできない。

(17) 唐末から五代へかけて大將がその部下を養子にすることは、歴史上に多數の例がある。試みに通鑑^{つうかん}を検すると、二六四卷から二六八卷までのわずかに四卷のうちに十例を見出す。とくに開平四年十一月(卷二六七)の條には、唐のすえ宦官の兵權をにぎったものが、多く軍中の壯士を養って子として勢力をかためたので、諸將もこれにならい、蜀王となった王建はことによく、假子百二十人あったとあり、胡三省の注には「假父假子はみな利をもつてするもので人倫の正ではない」といっている。わが國の武士が源氏にしたがえば源氏を稱し、徳川氏の臣が松平姓を賜うがごときもので、封建の世には珍らしいことではあるまいが、中國の古來の慣習には合しないところであったから、胡三省は「人倫の正にあらず」と斷言したのである。異姓のものが兄弟となることも、これに準じて考えることができる。

(補注) 杜預は晉代の人(二二——二八四)。序文中に春秋の經に對する左氏の傳の筆法に五の例があることを説いた條に『五に曰く、惡を懲^{おと}して善を勸む』とある。元刊本の「秦併六國平話」(元刊本平話五種の一)(三國志平話と同じころの刊行と考えられる)の發端にも『孔夫子は……そのころ十二國すべて二四二年の事蹟を歴史書にあらわし、春秋とよんだ、……善事をなしたものは、これをほめそやして人に勸を知らしめ、惡事をなしたものは、これをそしって、人に怕れを知らしめた』云々とある。春秋の筆法のなかでこれがもっとも重要な箇條と考えられたのである。なお、杜預のことばは、實は左傳の成公十四年の原文をそのまま用いたものであることを、故小島祐馬博士の指教によって知ったから、ここで附記する。左傳著作の年代は、ほぼ西曆前四世紀から前三世紀のあいだだといわれる。

附考一 「三國演義」における佛教と道教

佛教的な「三國志平話」ではなお強く、「演義」ではすこぶるうすくなることは、すでに本文中にのべた。「演義」の中に佛教の信仰のあとが、なお残存している唯一の例ともいうべきは、「玉泉山に關公 神を顯わす」(毛本第七十七回)の一段である。關羽は吳と魏の兩軍のはさみ打ちにあって、荊州を守りおおすことができず、ついに孫權の前で斬られたが、かれの英魂は當陽縣玉泉山にすむ老僧、普靜のもとに現れる。普靜はかつて汜水關の鎮國寺において、關羽が曹操の部下の下喜のためにだましようとしたとき、ひそかにそれを知らせて、かれの危険をすくったことのある僧であった(毛本第二十七回)。このたびも關羽の魂が「我が頭をかえせ」とさけびつつ空中をさまよっているのを見て、因果を説きかせ、かれの魂はそれを聞いて大いに悟り、普靜の前にぬかづいて歸依し、これよりのち玉泉山で「聖を顯し民を護った」ので、郷人らはその德に感じ、山のいただきに廟を建立し、四時祭をいとなんだというのである。弘治本(卷十六)では、このあとに「傳燈錄」を引き、唐の儀鳳年間(六七六―六七八)の禪僧神秀(六祖)が玉泉山で關羽の神にあり、それから寺の伽藍として祭ることになったこと、また關羽の神が解州(今山西省解縣)の蚩尤神の害をしずめた功も記されている。(解州の事件は宋の大中祥符七年―一〇一四年―におこったとせられ、關羽の神靈をかれの生地である解州にまねくことをすすめたのは張天師だというから、このときには關羽は佛教の守護神から道士の崇拜をも得るようになっていたのである。本文の注13に引いた井上以智爲氏論文参照。)

このことは戯曲にもしくまれた――「關雲長大破蚩尤」孤本元明雜劇第九七――ことは井上氏も注意された。明の王世貞(一五二六―一五九〇)の宛委餘編――弇州山人四部稿卷一七四には、關羽の廟にこの事をえがいた壁畫のある

ことをしるしている。注13にあげた唐の董挺の碑文によると、關羽の靈がはじめてあらわれたのは隋の高僧智顗が天台山から玉泉山に來たときであったと言い、智顗すなわち智者大師の玉泉寺を開基したのは開皇十二年(五九二)だったと推定されるが、ここに見える神秀の傳説はおそらく天台宗おとろえ禪宗がさかんになったのちに起ったものであらう。

これに反し道教的思想は全篇にみながっているといってもよい。智謀の士のすぐれた知恵をたたえる餘り、人間以上の神仙にまつりあげてしまうのは、ひとりこの「三國志平話」にかぎったことでなく、元刊平話五種のうち、たとえば戰國時代の樂毅と孫臏の戦をものがたった「樂毅圖齊七國春秋後集」においても、孫臏すなわち孫子はほとんど魔術師であり、その師たる鬼谷子は仙人とされている。三國志平話では諸葛亮が、それと同様に魔術師の性格をもつ。魯迅に「多智にして妖に近し」の評あるゆえんである。平話では諸葛孔明は『天地の機に達し、神鬼もはかり難き智(原本では志に作るが同音の誤であらう)』ありて、風をよび雨をよび、豆をまけば兵となり、劍をふるえば河となる』(卷中)異常な能力をもつ。そして、かれの最初こもっていた草庵の地臥龍岡は『南陽鄧州武蕩山』にあるとせられることは注意にあたいする。というのは武蕩山はすなわち武當山で、いま湖北均縣の南にそびえる高山であるが、南朝以來、道教の靈地であり(宮川尙志氏、六朝宗教史、一五八ページ)、また拳法の一派がここを本山とし、北の少林寺(河南省登封縣)とならんで有名である(屠思聰、中華最新形勢圖による)。諸葛孔明のいた臥龍岡は河南省南陽縣の西南にあって武當山から直線距離中國の里數で三百里ほどへだたっている。ほぼ武昌と岳州ぐらゐの距離がある。その二か處を強いてむすびつけたのは、かかる道教の信仰がもたっていることはいうまでもない。諸葛孔明の智力が凡人のものでないと感ぜられたとき、そこに特別の修行または傳授のごときものが想像され、それが自然に比較的にかい道教の靈地(武當山には眞武帝君をまつた廟がある)にむすびついたのである。武當山臥龍岡とつづけてよぶこ

とは「平話」だけでなく元の戯曲にもある。元の演劇では、孔明は道士の服裝をして登場し、このことは現在の舊劇——いわゆる京劇——でも同様であり、またかれは臥龍先生の道號をもつ。道號はすなわちかれの道士としての身分をあらわすのである。かればかりでなく、かれの青年時代の友人であった江東の八俊とよばれる人々は、元の戯曲ではすべて道士であり魔術師である（高文秀作の「劉玄德獨赴襄陽會」孤本元明雜劇第九）。

「演義」においては、武當山と臥龍岡が隣同士でもあるかのような幼稚な觀念は除かれたものの、孔明はやはり魔術師的な性格を失わない。だから赤壁の戦においては、かれは曹操の水軍をやきうにするために、東風をいのる。その場面の敘述は、まったく道士——魔術師のやりかたである（毛本第四十九回）。そこだけでなく、五丈原頭の悲壯な死にあたって、星を祭って死期をおくらそうとしたりする。かれの死を知って追撃してくる司馬仲達の軍をむかえうった蜀の兵の意外に手ごわいのおどろく「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」一節においても、孔明はあらかじめ自分の死骸を、しに安置し、米七つぶを口に入れ、足もとに一つの燈火をおいておくと命ずる（毛本第四百四回）。

孔明のかかる性格は、おそらく關羽の神格化とひとしく宋元以來、民衆の心のそこに深く根をおろしていたのであって、孔明といえ七曜壇上に風をいのるすがたを思いうかべる人々の娛樂物であった以上、「演義」の作者にとっても、それを根本的に變更することはできなかったであろうという辯護も一おうは成り立つであろう。しかしそれが、せっかく史實への顧慮によって、いちじるしく現實性を増したこの小説の缺點となったことは認めねばなるまい。ことに後半では活躍するのが孔明一人であるだけに一そう目立つのである。水滸傳では「軍師」呉用が諸葛孔明にあたる地位を占めるが、呉用が加亮先生という道號をあたえられているのは、諸葛亮以上の智慧のもち主であるとの意味であろうが、魔術師としての役割はべつに公孫勝という道士の仕事となっていて、いわば孔明の役は二人の分擔になった結果、不自然さが幾分減じただけでも進歩といわねばなるまい。ここには、道教の色彩が佛教のそれに比し、こ

の小説では、きわめて濃厚であることを指摘したのである。

（補注） 清の蒲松齡の「聊齋志異」卷十四、「武技」の篇の後に附せられた王漁洋（王士禎）の批と稱する文に『拳勇の技は少林を出家となし、武當の張三峰を内家となす』云々とある。呂湛恩の注に「萬姓統譜」を引き張三丰は洪武二十六年（一三九三）に死したとあるが、武當山が拳術の本山として知られたのは或いはもっと古いことでないかと思う。丰と峰は同音の字。

附考二 「三國演義」の本づいた歴史書

「三國演義」の作者が「平話」のようなはなはだしい荒唐無稽をはなれて、できるだけ歴史事實に近づこうとしたとき、そのよりどころとなった書物が何であったかは、いささか問題がある。小説のえがく三國時代の史實について、もっとも典拠となるのはいうまでもなく晉の陳壽の「三國志」であるが、わたくしは「演義」の作者が見たのが「三國志」の原本ではなかったらうとの説に同意し、^(注)しかし作者は「三國志」以外の史書をも参考にしていると考える。

(注) 十七史詳節二七三卷は宋の呂祖謙の編と稱し、「三國志」の抜き書二十巻も含まれていることは四庫全書提要(卷六五、史鈔類存目)に見える。わたくしは今、「詳節」を見る便宜がないが、内閣文庫所蔵の宋版「三國志」詳節の記述は樋口龍太郎氏のなされたものがあり(斯文)九卷および十卷)、長澤規矩也氏は「三國演義」がこの「詳節」をよりどころにしたと論ぜられた(支那學術文藝史、昭和二十三年修正版)。十七史詳節の完全な本は宮内府に宋版(いわゆる麻沙本)および朝鮮刊本が藏せられている。

まず演義の本づくところは陳壽の「三國志」のみでなかったことは、つぎの一例だけでも知られるであろう。「演義」の巻一(「董卓議りて陳留王を立つ」)大將軍何進が十常侍ら宦官を除こうと計りながら、優柔不斷で時機を失し、かえって十常侍のために殺されたのち、部將の袁紹・袁術らは兵をひきいて宮中に亂入するくだりに「何進の部將吳匡は青瑣門外で火を放ち、袁術は兵をひきいて宮中におし入り、宦官とさえ見れば老若のわがちなく、のこらずうち殺した。……宮中からあがる火の手は天をこがし、張讓・段珪・曹節・侯覽らは太后と太子および陳留王をつれ出し、宮内官どもをひきつれて、後道を北の宮へと走ってゆく。このとき盧植は官をすてたがなお都を立て出てい

なかったで、宮中の變事を知るや、よろいを着け、ほこを手にはり廊下の下に立っていた。その窓のところから、はるかに段珪らが何太后をとり圍んでやって来るのを見ると、盧植は大ごえに『段珪の逆賊め、おめおめと生きながらえたその上に、よくも太后さまをお連れしたな』とよばわれれば、段珪は身をひるがえして走ってゆく。太后は窓から飛んで出たのを、盧植がいそぎ助けたので、これは無事であった。(毛本第三回)とある。

この段は陳壽の「三國志」の魏志(卷六)袁紹傳にはただ「袁術は虎賁をひきいて南宮嘉德殿青瑣門に火をかけて、段珪らをおい出そうとした。珪らは出ようとせず、帝および帝の弟陳留王を劫につれだして小平津に走った」とあるだけで、くわしい記事は「後漢書」の(卷九十九)何進傳に見え、「通鑑」(卷五十九)はそれによっている。「後漢書」では「何進の部曲の將吳匡、張璋はつねづね何進に愛せられていたが、何進の殺害されたことを聞くと、兵をひきいて宮中に入ろうとした。宮門は閉ざされていたので、袁術は吳匡と力をあわせて攻撃し、中黃門は兵士らと門を守った。かくて日暮になると、袁術は南宮の九龍門(この三字を「通鑑」は袁宏の「後漢紀」によって青瑣門に作る)および東西宮に火をかけ、張讓らを追い出そうとした。張讓らは大輿に參入して太后に、大將軍の兵士らが反亂をおこしたと申しあげ……そこで太后と天子および陳留王をつれ出し、また省内官屬をひきつれ、複道から北宮へ走った。尙書盧植は戈をとって閣道の窓の下にいたが、上をとる段珪にむかって詰問したので、段珪らはおじ氣づき、とうとう太后をはなしたので、太后は閣からとび下りて助かった。」とある。「演義」に青瑣門となっていてるところから推すと、その本づいたのは、おそらく「通鑑」であって、直接に「後漢書」によったものではあるまい。わたくしが「うら道」と譯したのは「演義」の「後道」であって、毛本も同じであるが、これは「通鑑」および「後漢書」の複道の誤字にちがいない。これをまちがえたのは羅貫中であつたか、あるいはそののち寫し傳えた人の書き誤りであるかはわからぬが、毛本も同じ誤をおそっている以上、數百年來それに氣づいた人がなかったらしい。複道はすなわち閣道

であって、地面から高くはなれた渡り廊下である。盧植はこの廊下の下にたたずんでいて、段珪らをしかりつけたのである。「演義」の原文は「盧植……立於閣下、窓前遙望見段珪……」とあって閣は何であるかわからぬ。また太后が飛び出した窓も何處であるか明らかでないが、「後漢書」および「通鑑」により、たんに閣(閣はがんらい門のわきのくぐり戸を意味するが、古くから閣と通用するようになった。だから閣道は正しくは閣道と書くべきで、閣道はすなわち複道である)でなく閣道であることが明らかになった。「後漢書」に「太后投閣得免」とある閣も實は閣と書くべきであって、閣道の上から地上にとびおりたのであった。

この一段は「通鑑」をぬき書した「資治通鑑綱目」(南宋の朱子の著とせられるもの)巻十二にも見え、そうとう省略はされているものの、青瑣門の名や複道および閣道(明の嘉靖十四年、西暦一五三五年刊本によると、閣は閣に作る)の文字も出ているから、「演義」の作者は直接に司馬光の「通鑑」の原本によらず、朱子の「綱目」を本としたかもしれない。明代には歴史物語が多数出版されたが、その多くは朱子の綱目をよりどころとしているらしい。「三國演義」も萬曆年間(一五九二)以後の刊本には表題に「按鑑」の二字を加えたものがある。それは他の小説におけると同じく「綱目」によって各巻のふくむ年数を書きしるしている。「三國演義」の作者のよったのが綱目であるか否かをなお確定することはむずかしい。しかし、いづれにせよ、もともと「三國演義」は小説ではあるが、年をおうて敘述されているところは、いわば編年體の歴史とも見なしうる性質をもち、そのように作るためには紀傳體の正史——たとえば陳壽の「三國志」——の外に、通鑑(もしくは、その綱目)のような編年史を参考する必要のあったことが想像される。右にあげたのはただ一つの例にすぎないが、それがわたくしの單なる想像でないことを證明する。

また作者が正史の「三國志」の外に、「後漢書」を参考したことは、つぎの一例が示すであらう。

それは荀彧の死のくだりで、演義では、曹操は赤壁の仇をむくいようとして四十萬の大軍をおこして南征する、そ

のとき董昭が『古より人臣として、丞相(曹操をさす)ほどの功をたてたものはありません』と曹操が多くの反亂者をうちほろぼし漢室を復興したいさおしを、ほめたたたえた上で『當然、魏公の位をうけ、九錫を加えらるべきだ』と勸告する。九錫は王者の用いる車馬衣服その他の名稱であって、これに加え、かつ魏公に封ずることは、漢の天子が曹操を、他の臣下と區別して王者として待遇することを意味する。それはやがて禪讓、すなわち魏が漢に代って天下をおさめることへの前ぶれになる。そこで荀彧は、これまで常によき協力者として曹操を助けて來たのであったが、あくまでも漢室の臣として忠誠をつくすべきことを主張した。曹操はこれをきくと顔色をかせ、けっきょく董昭の意見が通った。さて南征に従った荀彧は病のため、とちゅうに止まったが、曹操はかれに食物一はこを贈った。はこの上には曹操の自筆の封がしてある。開いて見ると何もはいていない。荀彧は曹操の下心をさとして毒をのんで死ぬ(弘治本巻十三、毛本第六十一回)。弘治本では、このあとに史官讀して曰く、と五言八句の詩をのせたうえ(これは小説の作者の作らしい)、さらに「論に曰く」「讀に曰く」とあって百字にあまる議論が附加されているが、これは實は正史たる「後漢書」(卷百)の荀彧の列傳の末にある文章そのままなのである。ただし小説としては、いささか讀むのにわずらわしい處だから、毛本がそれを省略したこと(あるいは、それ以前から省略は行われたかも知れぬ)わたくしも賛成する。

重要なことは、この一段は正史の「三國志」でもなくまた「通鑑」あるいは「綱目」にもよらないで、「後漢書」の列傳によっていることであって、それは「三國志」以下は、ただ荀彧は「藥(すなわち毒を飲んで卒した)」とのみある(「三國志」魏志卷十、通鑑五十八、建安十七年條、「綱目」卷十四同)のに對して、曹操が食物をおくり、ひらいて見たら空の器であつたとするのは後漢書だけだからである。そうなると荀彧はただの自殺でなく、死を強制されたのである。しかもそれを「空器」をおくるといふやり方で強要するところ、いかにも「奸雄」曹操の面目がさながら

にあらわれていて、より小説的であるから、作者は、こちらを取ったのであるうが（「三國志」の裴松之注には魏氏春秋を引いて、この「空器」のことをせている。「後漢書」は「三國志」よりのちに出た書物であるから、著者范曄のよりどころになったのは、たぶん魏氏春秋であろう）、「三國志」その他をすてたことは事實である。いったい正史の「三國志」は魏のあとをうけた晉に仕えた陳壽の著作であるから、魏を正統の君主と見なした。ただもともと蜀の地方の人であったから、蜀に對する同情もひそかにあらわれているという論者もあるが、表面的にもせよ漢の後繼者をもって任じた蜀をおとしめてあることは、非難者がむかしから多い。范曄の後漢書は、魏の曹操が篡奪者であることを明らかにしている。荀彧の死のばあいも、「三國志」には見られない曹操の心中に立ち入って、その意圖を暴露しているのであるが、これは判官びいきならぬ蜀への同情者としての立場で書かれた小説「三國演義」には、好つごうであった。作者がこの場あい「後漢書」のほうを取ったのには、そのような意味もある。

もっとも、はじめにあげた「十七史詳節」には當然、「後漢書」もふくまれていたはずであって、「後漢書詳節」には、おそらく論贊の全文がのせてあり、この一條も、やはり「後漢書」の原文からではなく、詳節によっているのであるう。「通鑑」の考異には「後漢書」と「三國志」との異同がしるされ、それはそのまま胡三省の注にも引用されているが、もちろん論贊まではのせていない。それを證するのは次の一例である。

董卓は獻帝を擁立したが無道のふるまい多くして、人心離反し、ついに王允と呂布らの謀によって宮中で殺されたのは初平三年四月のことであった。「演義」ではこのあとに「史官の詩」と稱するもの三首および邵康節（宋の邵雍）の詩一首をのせた上、さらに論および贊を引用している。それはやはり「後漢書」（卷一百二）董卓傳の論贊の全文であるが、その下のわり注に「已上、詳節に見ゆ」と明記しているからである（弘治本卷二）。

日本では無論であるが、中國においても正史の原本を所蔵すること、およびそれを讀破することは誰にでもできる

ことではない。印刷術がそれまで少數の貴族の手に獨占されていた知識を、もっとひろまるようにしたのは宋代にはじまるが、それでも正史のような分量の多い書物を取りそろえて所有することは容易なことではなかった。だから「十七史詳節」のような本が流行したのである。「三國演義」が、このような抜き書きをもとにしているといえ、けいべつの念をもつ人もあらう。それはたしかに正史の原本に比し不完全な知識しかもたらさないものにはちがいないけれども、ぬき書きされたかぎりでは、原文に忠實であるらしいから、「十八史略」式の書きなおした本にまさることは萬々であらう。

このことは小さなようではあるが、「演義」の作者の教養の程度をうかがうに足るものであるから、あえて煩をいとわず辯じたのである。ただほとんど附加える必要もないことではあるが、「演義」の作者のよりどころとした歴史書が、われわれの想像するよりはずっとまづしい、とぼしい史實しか供給しないものであったとしても、それはこの作品の文學としての、あるいは小説としてのまづしさを意味するものではない。作家が作品を書くまえに、材料として利用した事柄の多いか少いか、その作品の實質のゆたかさの度合を決定しはしない。文學においては、作家の想像力が最後の決定者となるのである。わたくしは、ここで改めて「三國演義」の文學的價值をくわしく論じようとしているのではないが、さきにあげた荀彧の死の場面においても、作者が「後漢書」の記事をとりあげたことは、曹操を單に逆臣として斥けただけでなく、このようなやり口にも、かれの考えぶかさが、讀者に何か氣味のわるさを感じしめるのであって、相當な成功を収めたといえる。これに止まらず、一たいに曹操という底の知れぬ人物の描寫は、やや一面的ではあるものの、その底のふかさを或る程度まで寫し出したところにも、この作者の力量があらわれていると、わたくしは考える。作者の利用しえた材料が、今日から見れば意外なまでに貧弱だったということは、むしろ作者の文學者としての能力のすぐれていることを示すものだといつてよいのではなからうか。

中国小説史の研究

昭和四十三年十一月二十九日 第一刷発行 ©

定価 千円

著者 小川 環樹

発行者 岩波 雄二郎

発行所 東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
株式会社 岩波書店

精興社印刷・複製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします